

群馬県前橋市

総社観音沢遺跡

1997

総社観音沢遺跡調査会

群馬県前橋市

総社観音沢遺跡

1997

総社観音沢遺跡調査会

序

古くは毛の国と呼ばれた群馬県は、古代より高い文化が栄え、今日に残る多くの遺跡が当時の様子をしのばせています。

とりわけ前橋総社地区は、山王廃寺や国府、国分僧尼寺等の遺跡が集中する、古代群馬の政治、文化の中心地でした。

今回、その山王廃寺のすぐ北側に位置する蚕業試験場内に財団法人群馬県農業公社の重機格納庫等の建設が計画され、事前の試掘調査により遺跡が確認されたことから、本調査会が組織され、事業に先立ち埋蔵文化財発掘調査を実施いたしました。

その結果、竪穴住居などの遺構が検出されるとともに、土器や鉄鏃等の遺物が出土しています。ここにその調査報告書を刊行する運びとなりましたが、この成果が広く活用され、地域の歴史を解明する一助ともなれば幸いです。

最後に、発掘調査から整理作業を経て報告書の刊行に至るまで、ご指導・ご協力をいただきました群馬県農政部農政課、財団法人群馬県農業公社、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、山武考古学研究所、そして、発掘、整理にあられた多くの皆様に厚く御礼を申し上げ、序といたします。

平成9年3月

総社観音沢遺跡調査会
会長 林 弘二

例 言

1. 本書は、群馬県前橋市総社町総社2326-2に所在する総社観音沢遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、財団法人群馬県農業公社重機格納庫建設に伴う埋蔵文化財発掘調査として実施した。
3. 調査は、総社観音沢遺跡調査会の委託を受け、群馬県教育委員会及び前橋市教育委員会の指導のもと山武考古学研究所が実施した。担当は折原洋一である。
4. 調査期間は、平成7年10月30日から同年11月18日までである。
5. 整理調査及び本書の編集は、折原洋一が担当し、今成勝子・磯 洋子・石田利子・小川悦子の協力を得た。
6. 発掘調査によって得られた資料は、一括して前橋市教育委員会に保管してある。
7. 本書の執筆は、第1章を齊藤和之、第2～5章を折原洋一が分担した。
8. 調査に際しては、以下の諸氏・諸機関にご指導、ご協力をいただいた。記して感謝の意を表したい。

群馬県教育委員会 前橋市教育委員会 財団法人群馬県農業公社 開成測量株式会社 株式会社東日本重機 たつみ写真スタジオ 外山政子 三浦京子

9. 調査参加者は下記の通りである。

石井 しま 伊丹 松子 今井 幸子 今井 くに 岩井 勝代 大塚 虎雄
大山 浩子 榊原 あい 桜井 貞子 桜井 敬一 清水又三郎 神宮 のり
瀬間 ゆき 久保原はつえ 久保原明男 田村たか子 高橋達三郎

凡 例

1. 本報告書中の方位は真北を示した。
2. 遺構実測図の縮尺は竪穴住居・土坑1/60、溝を1/120とした。
3. 遺物実測図は土器・須恵器・灰釉陶器・瓦を1/4、鉄器・土製品を1/2とした。
4. 抄録図及び第1図は、国土地理院発行2万5千分の1『前橋』を使用した。

目次

序

例言・凡例

抄録

目次

第1章 調査に至る経緯と調査組織	1
第2章 調査の方法と経過	2
第3章 遺跡の環境	2
第4章 遺構・遺物	5
第5章 まとめ	18

挿図目次

第1図 遺跡位置図	3	第9図 土坑(3)	10
第2図 全体図	4	第10図 土坑(4)	11
第3図 1号住居	5	第11図 土坑出土遺物(1)	11
第4図 1号住居出土遺物	5	第12図 土坑出土遺物(2)	12
第5図 2号住居	6	第13図 1号溝	15
第6図 2号住居出土遺物	6	第14図 1号溝出土遺物(1)	16
第7図 土坑(1)	7	第15図 1号溝出土遺物(2)	17
第8図 土坑(2)	9		

表目次

表1. 1号住居出土遺物観察表	5	表8. 10号土坑出土遺物観察表	14
表2. 2号住居出土遺物観察表	6	表9. 11号土坑出土遺物観察表	14
表3. 1号土坑出土遺物観察表	13	表10. 1号溝出土遺物観察表(1)	14
表4. 5号土坑出土遺物観察表	13	表11. 1号溝出土遺物観察表(2)	15
表5. 6号土坑出土遺物観察表	13	表12. 1号溝出土遺物観察表(3)	17
表6. 8号土坑出土遺物観察表	13	表13. 1号溝出土遺物観察表(4)	18
表7. 9号土坑出土遺物観察表	14		

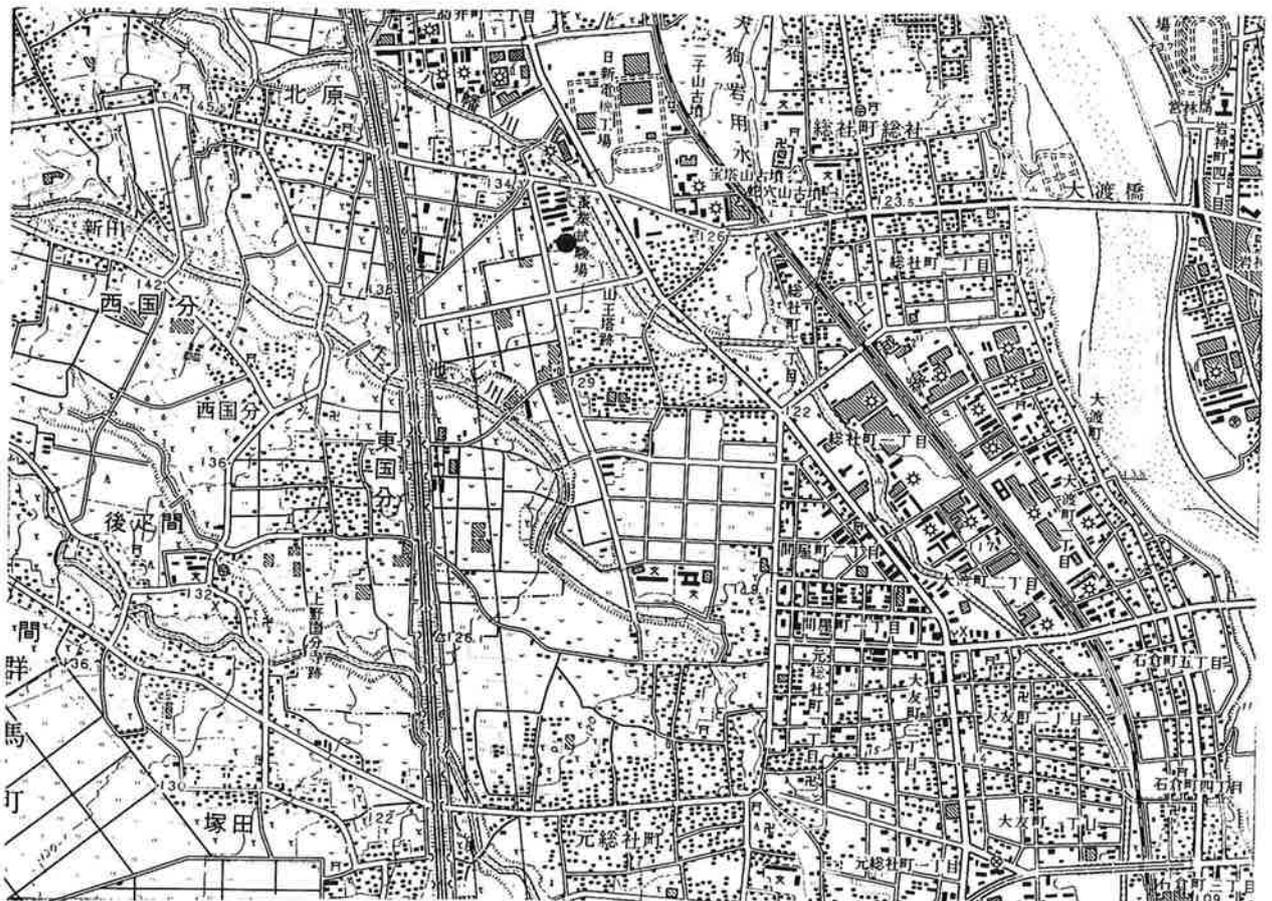
図版目次

PL-1-1 調査区全景	- 7	4号土坑	- 5	10号土坑
- 2 1号住居		- 8 5号土坑	- 6	11号土坑
- 3 2号住居	PL-2-1	6号土坑	- 7	11号土坑
- 4 1号土坑	- 2	7号土坑	- 8	1号溝
- 5 2号土坑	- 3	7・8号土坑	PL-3	出土遺物(1)
- 6 3号土坑	- 4	9号土坑	PL-4	出土遺物(2)

抄 録

フリガナ	ソウジャカンノンサワイセキ						
書名	総社観音沢遺跡						
副書名							
編著者名	折原洋一、斉藤和之						
編集機関	山武考古学研究所 / 〒286 千葉県成田市並木町221番地 0476 (24) 0536(代)						
発行機関	総社観音沢遺跡調査会 / 〒371 群馬県前橋市大手町1丁目1番地1号 群馬県教育委員会内						
発行年月日	西暦1997年3月15日						
所収遺跡名	所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
総社観音沢遺跡	群馬県前橋市総社町総社2326-2	市町村 102016	遺跡番号 7A-42	36° 24' 6"	139° 2' 00"	19951030 19951118	303㎡ 農業公社重機格納庫建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
総社観音沢遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 2軒 土坑 11基 溝 1条	平安時代 土師器・須恵器・ 灰釉陶器・土錘・瓦・刀子・ 鉄鏃		性格不明の溝状の遺構	

抄録図



第1章 調査に至る経緯と調査組織

群馬県教育委員会文化財保護課では、群馬県関係機関が実施する開発事業について、平素より各課・各機関へ、文書・パンフレット等を送付したり定期的な打ち合わせを行い、また、土地利用調整会議などの合議を通じてその把握に努め、必要な対応をとろうとしている。

平成7年4月、群馬県農政部農政課より、群馬県教育委員会文化財保護課に対し、前橋市総社町総社2,326-1群馬県蚕業試験場内に、財団法人群馬県農業公社の重機格納庫等を建設する計画について、所在地内の埋蔵文化財の有無に関する問い合わせがなされた。

これについて、文化財保護課では遺跡地図等を参照したところ、該当地が周知の遺跡地であり試掘調査の必要があるものと判断し、この旨を農政部農政課に回答した。この結果、工事によって地下の遺構に影響が及ぶと判断された300㎡について平成7年5月試掘調査を実施したところ、遺構・遺物等の存在が確認された。

このため、文化財保護課では農政課と遺跡の保存について協議を行ったが、事業の公共性等に鑑み、計画の一部変更等により可能な限り現状での保存をはかるとともに、遺構の破壊される部分については記録保存の措置を取ることとなった。

この本調査にあたっては、群馬県教育委員会、前橋市教育委員会、群馬県農政部農政課各関係者の協議により、群馬県教育委員会内に事務局をおく調査会を組織し、実施することとなり、こうした経過を受けて、平成7年9月19日、群馬県農政部長より県教育委員会あて、該当工事に伴う埋蔵文化財調査の依頼がなされ、本調査に着手することとなったものである。

なお、出土資料及び関係記録については、前橋市教育委員会にて保管・活用をはかる予定である。

平成7年度総社観音沢遺跡調査会組織表

区分	職名	氏名
会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林 弘二
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 部参事兼文化財保護課長	荒畑 大治
理事	群馬県農政部副部長兼農政課長	賛田 裕行
	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 次長	轟 公之
	前橋市教育委員会事務局 文化財保護課長	本山 卓
監事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 専門員	井川 達雄
	前橋市教育委員会事務局 文化財保護課 埋蔵文化財係長	駒倉 秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	巾 隆之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 指導主事	高井 佳弘
	同上 主任	飯塚 聡

平成8年度総社観音沢遺跡調査会組織表

区分	職名	氏名
会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部長	林 弘二
副会長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課長	土田 明
理事	群馬県農政部副部長兼農政課長	賛田 裕行
	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 次長	轟 公之
	前橋市教育委員会事務局 文化財保護課長	川合 功
監事	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課主幹兼専門員	井川 達雄
	前橋市教育委員会事務局 文化財保護課 埋蔵文化財係長	駒倉 秀一
事務局長	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課 課長補佐兼埋蔵文化財第一係長	巾 隆之
事務局員	群馬県教育委員会事務局文化スポーツ部 文化財保護課主幹兼専門員	斉藤 和之
	同上 主任	高島 英之

第2章 調査の方法と経過

調査の方法

調査は、群馬県教育委員会文化財保護課の確認調査の結果に基づき重機による表土除去を行い、遺構調査は人の手により実施した。調査区は公共座標を基準に5 m×5 mのグリッドを設定し、調査の便宜を図り、グリッドの呼称方法は南北軸を北よりアルファベットでA・B・C・・・とし、東西軸を東より算用数字で1・2・3・・・とする。遺構の調査は遺構の構築状況や埋没状態を観察し、できる限り写真及び実測図として記録を残すようにした。実測図は竪穴住居・土坑を1/20、溝を1/40の縮尺として作成した。写真撮影は随時行い、白黒35mm、カラースライド35mm、白黒6×7判の3種類を使用する。

調査の経過

調査は、平成7年10月30日より開始し、同年11月17日を以て終了した。

10月30日 調査区範囲を設定し、表土除去作業を開始する。

31日 表土除去作業を終了し、遺構確認作業を行う。

11月1日 遺構の調査を開始、グリッドを設定する。

2日 1・2号住居及び1～7号土坑の調査を開始する。

6日 1号溝の調査を開始する。

8日 8～11号土坑の調査を開始する。

9日 3・4・11号土坑の調査を終了する。

10日 1・2・5～10号土坑の調査を終了する。

14日 1号溝の調査を終了する。

15日 遺構配置図作成。機材搬出。本日を以て全ての調査を終了する。

17日 調査区の埋め戻しを行う。

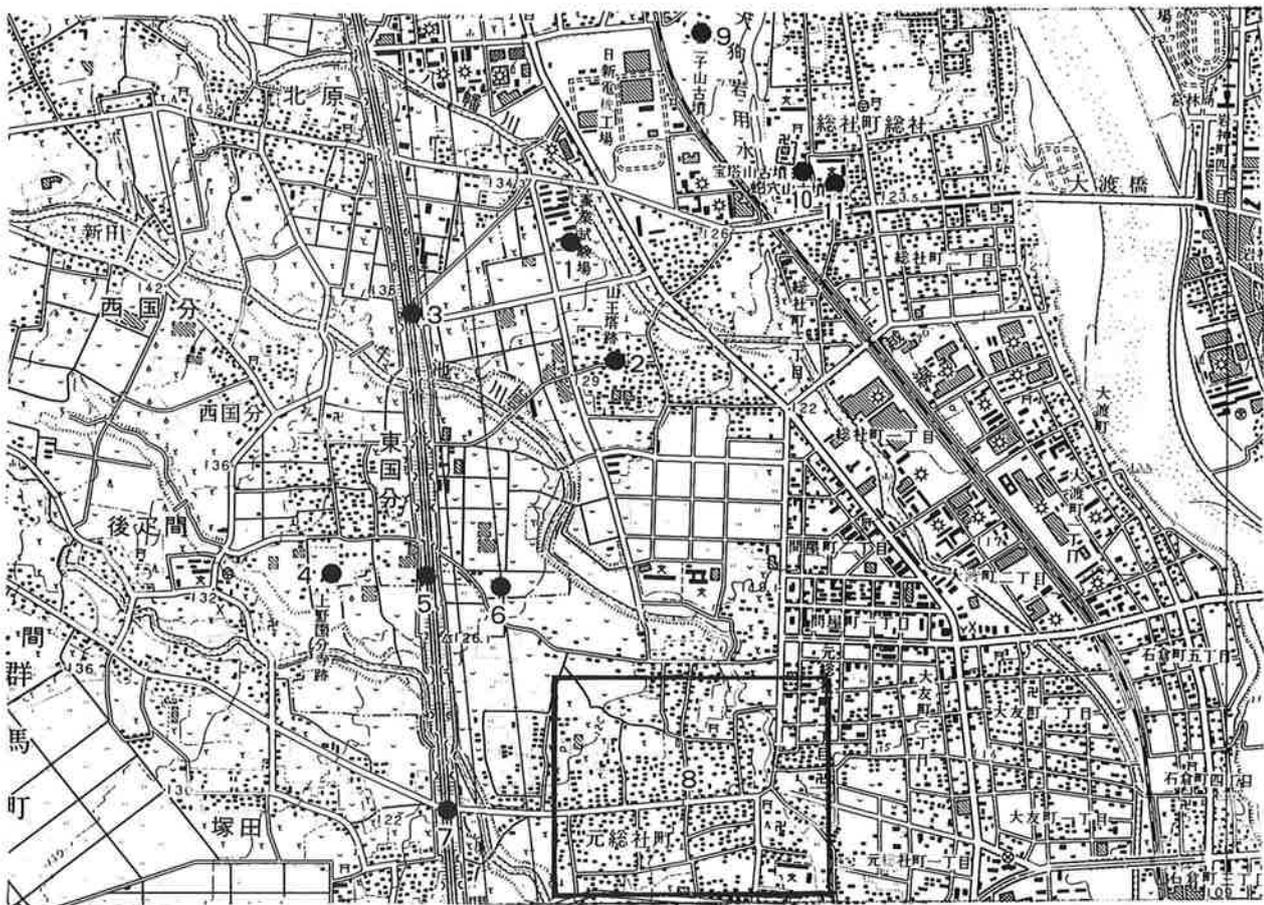
第3章 遺跡の環境

周辺の地形

本遺跡は、前橋市の西北部の総社町に所在し、利根川左岸の前橋台地上に立地する。前橋台地は利根川の堆積物である前橋砂礫層と榛名山起源の前橋泥流層などによって構成され、台地上には利根川に流入する中小の河川によって浸食された谷が数多く認められる。これらの中小河川のうちの八幡川と牛池川に挟まれた台地上に本遺跡は立地している。八幡川と牛池川の両河川は本遺跡周辺において北西から南東方向に走行しており、両河川に挟まれた台地は北西から南東に標高が低くなり、緩やかな傾斜を有している。今回の調査区は八幡川左岸に接した台地上に存在し、調査区の南側に接して八幡川の谷に連なる埋没谷が存在するようで、調査区内の南部は南東に低くなる谷頭状の等高線が認められる。

周辺の遺跡

本遺跡周辺には、縄文時代から中近世に至る数多くの遺跡が存在し、また多くの遺跡も発掘調査がなされ



1. 総社観音沢遺跡 2. 山王廃寺 3. 国分境遺跡 4. 国分僧寺 5. 国分僧寺・尼寺中間遺跡 6. 国分尼寺 7. 鳥場遺跡 8. 国府 9. 総社二子山古墳 10. 宝塔山古墳 11. 蛇穴山古墳

第1図 遺跡位置図

ている。

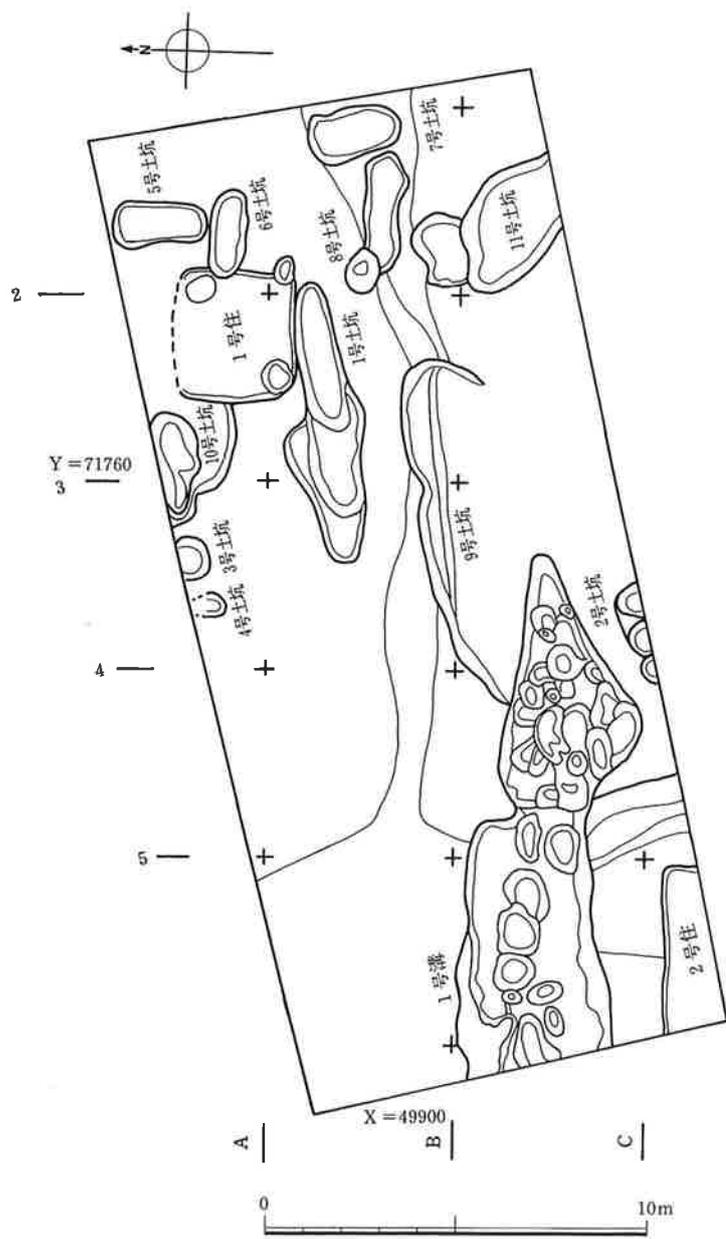
縄文時代の遺跡は、前期から後期にかけての遺跡が存在するが、多くが少量の遺物やわずかな遺構の検出にとどまり、ある程度の規模が判明しているのは国分僧寺・尼寺中間遺跡の加曽利E期の集落のみである。

弥生時代は、遺跡の分布は少なく、僅かに国分僧寺・尼寺中間遺跡で小規模の集落が検出されているに過ぎない。

古墳時代では、国分僧寺・尼寺中間遺跡で前期の集落が、国分境遺跡で後期の集落が、北原遺跡でFP下の水田址が検出されている。古墳では八幡川を挟んだ本遺跡北東の台地上に総社二子山古墳・宝塔山古墳・蛇穴山古墳などの著名な古墳が含まれる総社古墳群が存在する。

奈良平安時代では、本遺跡の南方に上野国府、南東に国分僧・尼寺、本遺跡に接するすぐ南側に山の上の碑に記され、定額寺の筆頭とされる「放光寺」と推定される山王廃寺が出現し、上野国の中枢地域となり、周辺には数多くの集落遺跡が見られるようになる。これらの集落中でも大規模な例として鳥場遺跡、国分境遺跡、国分僧寺・尼寺中間遺跡などが上げられる。山王廃寺は今回の調査区の南方500mに位置し、両者の間の畑には遺物が間断無く分布しており、同一の遺跡として捉えることができる。

中近世においては国府域の地割を利用して蒼海城が長野氏によって築城されているほか、発掘調査された各遺跡において中近世の陶磁器類を中心とした遺物が出土している。



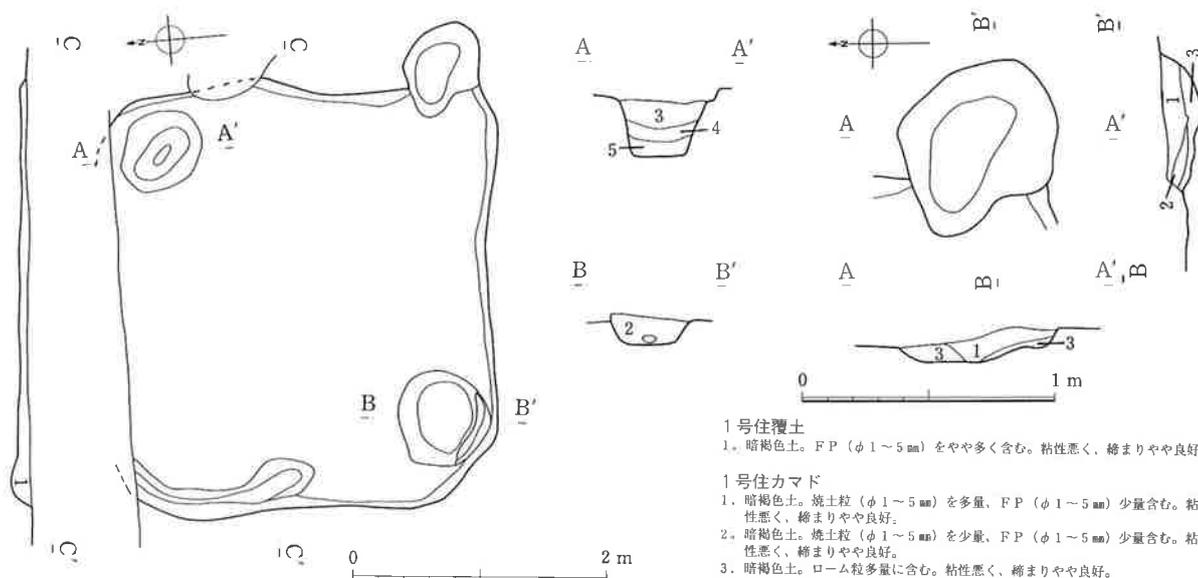
第2图 全体图

第4章 遺構・遺物

竪穴住居

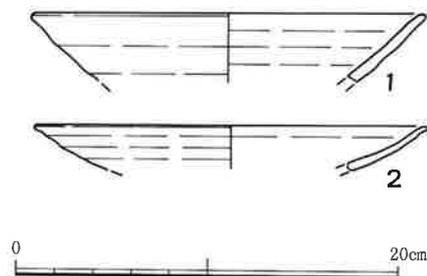
1号住居 (第3図・PL1-2)

本住居は、調査区北東部に位置し、住居北部を攪乱により、東壁の一部を6号土坑によりそれぞれ切られている。平面形状は東西長3.50m×南北長3m以上の隅丸の方形状を呈しており、主軸方向をほぼ東西に有



第3図 1号住居

している。壁は著しく削平を受けており、床面より最大10cmを残すに過ぎない。床面はローム面に構築され、ほぼ平坦であるが全体に軟弱である。壁溝は西壁の北半に存在し、幅が10~32cm深さが6cmの「U」字形の断面を有する。住居内には北東隅と南東隅に土坑が検出されており、いずれも本住居に伴うものと考えられる。北東隅の土坑は長軸長66cm、短軸長62cmの楕円形平面を有し、断面形は深さ27cmの鍋底状を呈す。南東隅の土坑は長軸長78cm、短軸長73cmの楕円形平面を有し、断面形は深さ50cmの鍋底状を呈す。カマドは東壁の南端に位置し、火床~煙道は壁外に存在する。壁外に延びる部分は幅63cm、長さ50cmの「U」字形の平面を有し、煙道は急角度の傾斜を持って立ち上がる。袖・天井は検出されていない。遺物は土師器・須恵器の小破片が少量出土したに過ぎない。



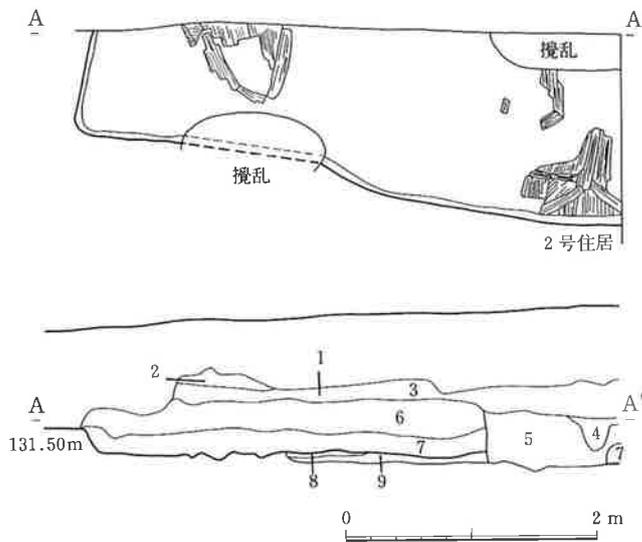
第4図 1号住居出土遺物

表1 1号住居出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器 坏	口径(15.3) 底径— 器高—	①還元焰 ②灰色 ③白色粒 ④口縁部片	ロクロ調整、口縁端部に丸味をもって僅かに外反する。	
2	灰釉陶器 塊	口径(15.3) 底径— 器高—	①灰釉 ②灰白色、釉-灰白色 ③ ④口縁部片	ロクロ調整、口縁端部に丸味をもって外反する。	

2号住居（第5図・PL1-3）

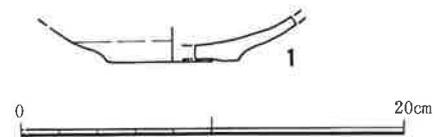
本住居は、調査区西南隅に位置し、住居南部～西部の多くが調査区外に延び、未調査となっている。平面形状は住居の大部分が未調査区に延びるため詳細な点は不明であるが、東西長4.40m以上×南北長1.55m以上の方角あるいは長方形を呈していたと思われる。壁は確認面より高さが15cm程で、ほぼ垂直に立ち上がっている。床面は粘性の強い暗褐色土層を構築面とし、ほぼ平坦である。また、床面直上には全面に炭化物が認められ、特に調査範囲の東と西北に比較的大きな炭化材が存在する。住居内における内部施設は未検出である。遺物は土師器の小破片が少量出土したに過ぎない。



第5図 2号住居

2号住居土

1. 埋土
2. 暗褐色土。B軽石を多量、C軽石・FP（φ1mm）多量含む。粘性悪く、締まりやや良好。
3. 黒褐色土。B軽石を多量、C軽石・FP（φ1mm）多量含む。粘性悪く、締まりやや良好。
4. 暗褐色土。B軽石を多量、C軽石・FP（φ1～5mm）少量、焼土粒（φ1mm）を少量含む。粘性悪く、締まり良好。
5. 黒褐色土。B軽石を多量、C軽石・FP（φ1mm）若干含む。粘性悪く、締まりやや良好。
6. 暗褐色土。FP（φ1～5mm）多量、焼土粒（φ1～3mm）を少量、炭化物（φ1～5mm）を少量含む。粘性悪く、締まり良好。
7. 暗褐色土。FP（φ1～5mm）少量、焼土粒（φ1～30mm）を多量、炭化物～炭化材を多量に含む。粘性やや悪く、締まり良好。
8. 褐色土。白色粒（φ1mm）少量含む。粘性、締まりとも良好。床面下土層。
9. 黒褐色土。白色粒（φ1mm）少量含む。粘性、締まりとも良好。床面下土層。



第6図 2号住居出土遺物

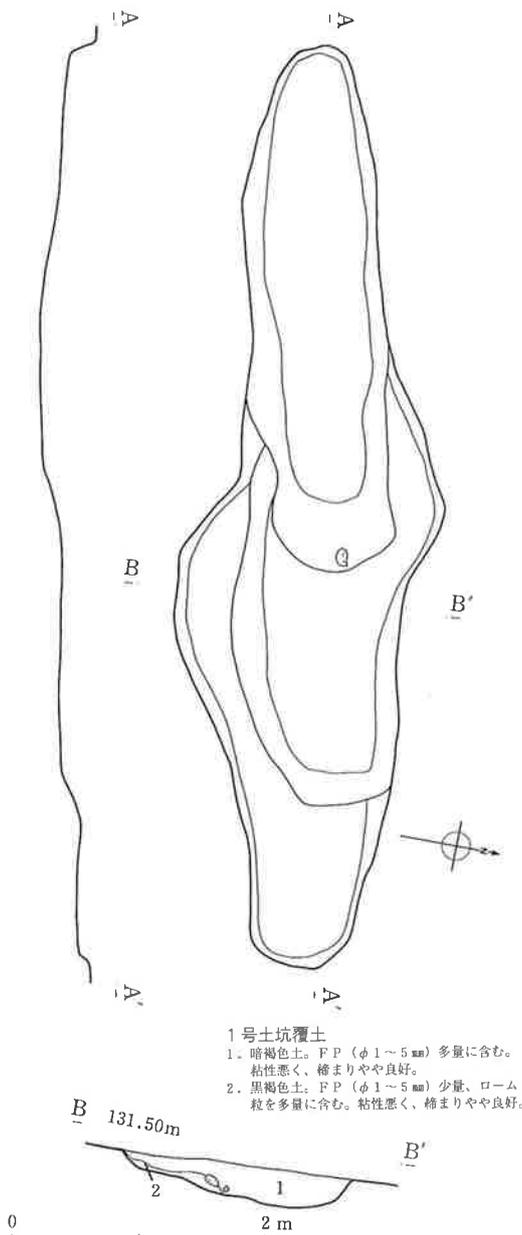
表2 2号住居出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 坏	口径 — 底径 (5.1) 器高 —	①酸化焰 ②にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒 ④底部片	口クロ調整、底部回転糸切り。	

土坑

1号土坑（第7図・PL1-4）

本土坑は、調査区東部の中央に位置する。平面形状は長軸長7.44m、短軸長1.80mの中央部に最大幅を有する溝状を呈している。横断面の形状は皿状を呈し、深さは最深部で確認面より34cmとなる。底面は西から東へと段状に深くなっており、数基の土坑の重複の可能性も存在するが、土層断面に重複の痕跡は認められていない。遺物は土坑中央部から西寄りにかけて土師器・須恵器が比較的多く出土している。本土坑の構築時期は出土遺物より平安期と考えられる。



第7図 土坑(1)

南北長0.58mの不整形を呈すると思われる、断面の形状は深さが確認面より12cmの鍋底状となる。遺物は土師器・須恵器の小破片が少量出土したに過ぎず、構築時期に関しては詳細は不明であるが平安期の所産と思われる。

5号土坑(第8図・PL1-8)

本土坑は、調査区の北東部に位置し、土坑南部の東西両壁の一部は攪乱により切られている。平面の形状は東西長1.22m、南北長2.45mの楕円形に近い隅丸長方形を呈し、断面の形状は深さが確認面より32cmの鍋底状となる。遺物は底面より僅かに高い位置の覆土中より3点の高台付坏が出土しており、出土状態からこれらの遺物は原位置を保持しているものと思われる。構築時期は出土遺物より平安時代の中頃と推定される。

2号土坑(第8図・PL1-5)

本土坑は、調査区中央部やや西寄りの南壁沿いに位置しており、土坑南部は未調査区に延びている。平面形状は3基の土坑が東西に重複した状況を示しており、各土坑は独立して構築されていたものと思われ、各土坑を東寄りa・b・cと呼称する。新旧関係はa土坑がb土坑よりも古くなり、c土坑とb土坑は新旧不明である。

a土坑の形状は、東西長1.08m×南北長0.65m以上の不整形の平面を有し、深さ22cmの皿状断面を持つ。

b土坑の形状は、東西長0.90m×南北長0.55m以上の円形の平面を呈すると思われる、深さ32cmの鍋底状断面を有している。

c土坑の形状は、東西長0.52m×南北長0.22m以上の円形の平面を呈すると思われる、深さ18cmの鍋底状断面を持つ。各土坑の遺物は、いずれも土師器・須恵器の小破片が少量出土したに過ぎず、構築時期に関しては詳細は不明であるがともに平安期の所産と思われる。

3号土坑(第8図・PL1-6)

本土坑は、調査区中央部の北端に位置し、土坑北部が調査区外に延びている。平面形状は東西長1.04m、南北長0.75mの不整形を呈すると思われる、断面の形状は深さが確認面より40cmの鍋底状となる。遺物は土師器・須恵器の小破片が少量出土したに過ぎず、構築時期に関しては詳細は不明であるが平安期の所産と思われる。

4号土坑(第8図・PL1-7)

本土坑は、調査区中央部の北端に位置し、土坑の北部は攪乱により切られている。平面の形状は東西長0.52m、

性格については出土した高台付坏が副葬品として置かれたかのような状況を示していること、土坑の規模・形態が人を埋めるのに充分であることから墓の可能性を多少なりとも考えてよいように思われる。

6号土坑（第8図・PL2-1）

本土坑は、調査区の北東部に位置する。平面の形状は東西長2.24m、南北長0.84mの不整楕円形を呈し、断面の形状は深さが確認面より16cmの鍋底状となる。遺物は羽釜が出土しており、構築時期は平安期と思われる。

7号土坑（第8図・PL2-2・3）

本土坑は、調査区の東部中央に位置する。平面の形状は東西長1.40m、南北長2.28mの南西部に突出部を有す不整楕円形を呈し、断面の形状は深さが確認面より20cmの皿状となる。遺物は皆無で、構築時期に関しては詳細は不明であるが覆土より平安期の所産と思われる。

8号土坑（第9図・PL2-3）

本土坑は、調査区の東部中央に位置する。平面の形状は全体として東西長3.62m、南北長1.04mの不整形を呈しているが、東部と中央～西部とでは大きく形状が異なり、2基の土坑の重複かもしれない。重複を考えた場合の東部の土坑形状は長軸長1.25m、短軸長0.90mの楕円形平面を有し、断面形は深さが82cm鍋底状となる。中央～西部の土坑形状は長軸長2.62m、短軸長0.94mの東西に細長い不整形平面で、断面形は深さが12cmの皿状断面を有す。ともに遺物は須恵器片が少量出土したに過ぎず、構築時期に関しては詳細は不明であるが覆土より平安期の所産と思われる。

9号土坑（第9図・PL2-4）

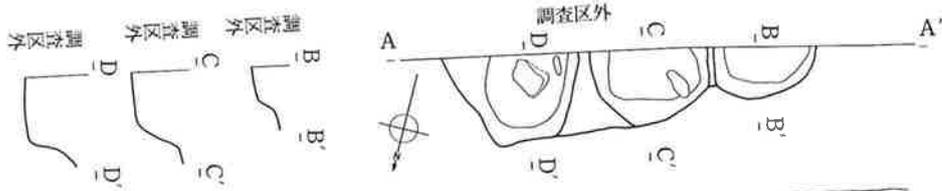
本土坑は、調査区のほぼ中央部に位置し、周辺は南に向かう傾斜面となっている。平面の形状は南壁はすでに消失しているが、東西長8.34m、南北長1.84mの溝状を呈すると思われる。断面形状は深さ30cmの皿状を呈する。遺物は覆土中より多くの土師器・須恵器が出土しており、また土坑東部の覆土上層には凝灰岩質砂岩の切石が集中して出土している。構築年代は出土遺物より平安期と考えられる。

10号土坑（第10図・PL2-5）

本土坑は、調査区の中央部やや東寄りの北壁沿いに位置する。平面の形状は東西長2.92m以上、南北長2.26m以上の不整形を呈している。断面形は深さが24cm皿状となる。遺物は皆無で、構築時期に関しては詳細は不明であるが覆土より平安期の所産と思われる。

11号土坑（第10図・PL2-6・7）

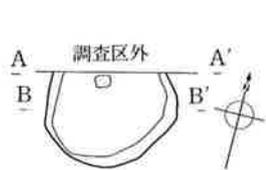
本土坑は、調査区の南東部に位置する。平面の形状は全体として東西長3.26m、南北長4.04m以上の不整形を呈しているが、北部と南部とでは大きく形状が異なり、2基の土坑の重複かもしれない。重複を考えた場合の北部の土坑形状は長軸長2.00m、短軸長1.20mの不整形平面を有し、断面形は深さが22cmの皿状となる。南部の土坑形状は長軸長2.52m、短軸長2.30mの不整形平面で、断面形は深さが32cmの皿状を呈する。遺物は少量出土したに過ぎず、構築時期に関しては詳細は不明であるが覆土より平安期の所産と思われる。



2号土坑覆土

1. 埋土
2. 黑色土。B軽石を多量に含む。粘性悪く、締まり良好。
3. 暗褐色土。C軽石・F.P. (φ1~5mm) 多量含む。粘性悪く、締まり良好。
4. 暗褐色土。C軽石・F.P. (φ1~5mm) 多量含む。粘性やや有り、締まり良好。
5. 暗褐色土。C軽石・F.P. (φ1~5mm) 少量含む。粘性やや有り、締まり良好。
6. 黒褐色土。C軽石・F.P. (φ1~5mm) 若干含む。粘性やや有り、締まり良好。

2号土坑



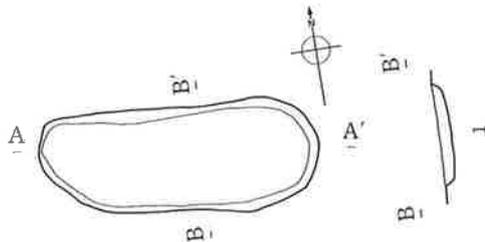
A 131.50m A'



3号土坑覆土

1. 暗褐色土。F.P. (φ5mm) 多量含む。粘性悪く、締まりやや良好。

3号土坑

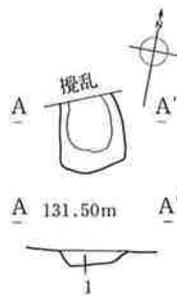


A 131.50m A'

6号土坑覆土

1. 暗褐色土。F.P. (φ5mm) 多量含む。粘性、締まりともに悪し。

6号土坑



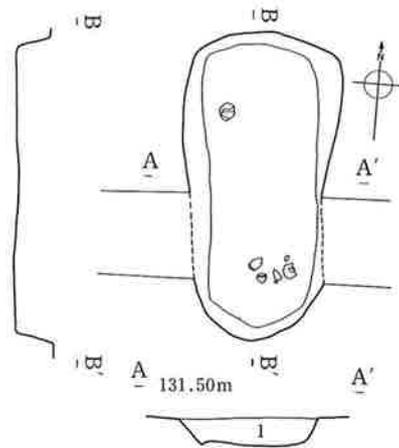
A 131.50m A'



4号土坑覆土

1. 暗褐色土。F.P. (φ5mm) 多量含む。粘性、締まりともに悪し。

4号土坑

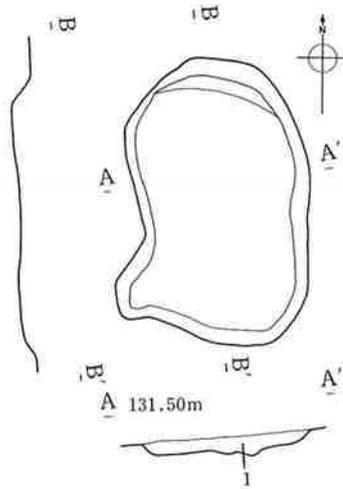


A 131.50m A'

5号土坑覆土

1. 暗褐色土。F.P. (φ1~5mm) 多量に、ローム堆 (φ5mm) 少量含む。粘性悪く、締まり良好。

5号土坑



A 131.50m A'

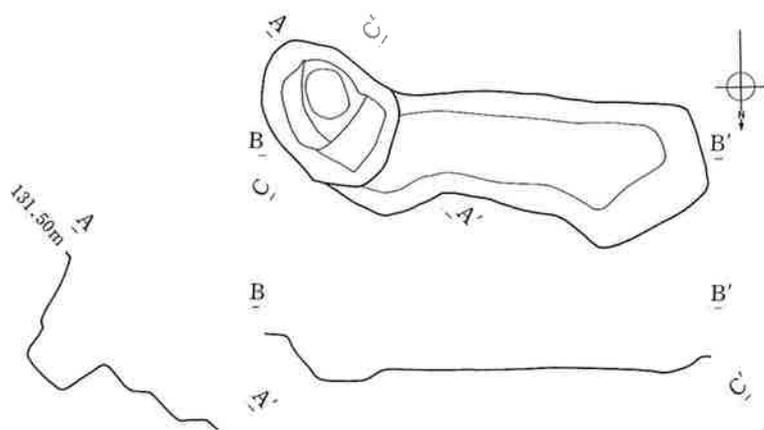
7号土坑覆土

1. 暗褐色土。F.P. (φ1~5mm) 多量含む。粘性、締まりともに悪し。

7号土坑



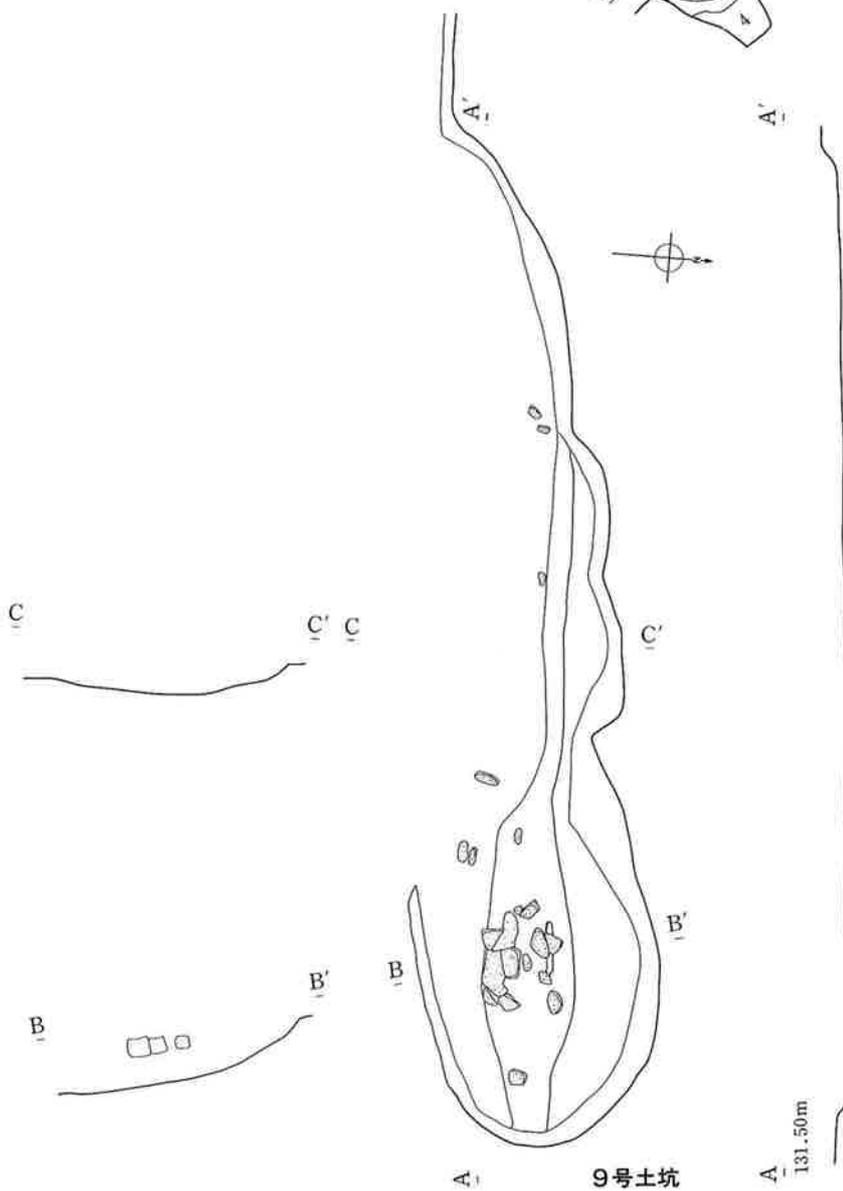
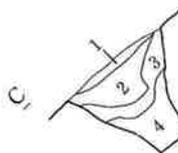
第8図 土坑(2)



8号土坑覆土

1. 黒褐色土、F P (φ 1-5mm) 多量含む。粘性悪く、締まりやや悪し。
2. 黒褐色土、F P (φ 1-5mm) 多量に、黄褐色斑 (φ 1-2cm) をやや多く含む。締まりやや悪し。
3. 明褐色土、F P (φ 1-5mm) 少量、黄褐色斑 (φ 1-2cm) をやや多く含む。締まりやや悪し。
4. 黄褐色土、F P (φ 1-5mm) 若干。粘性悪く、締まりやや悪し。

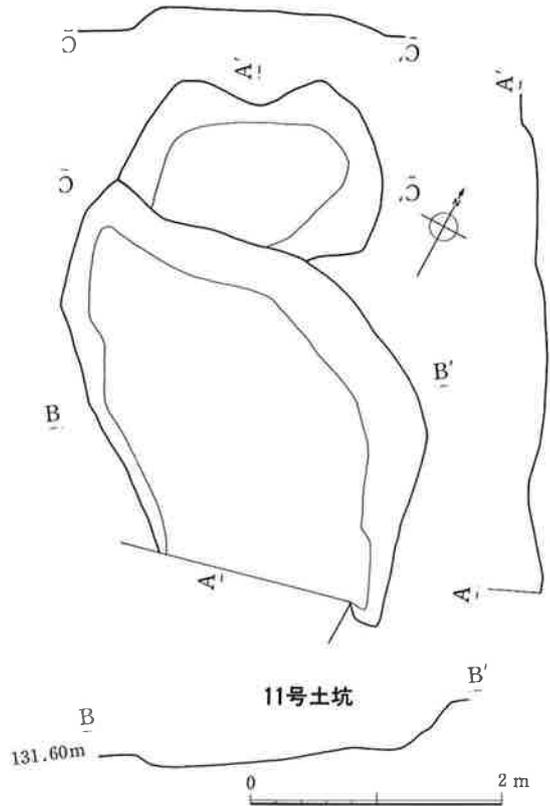
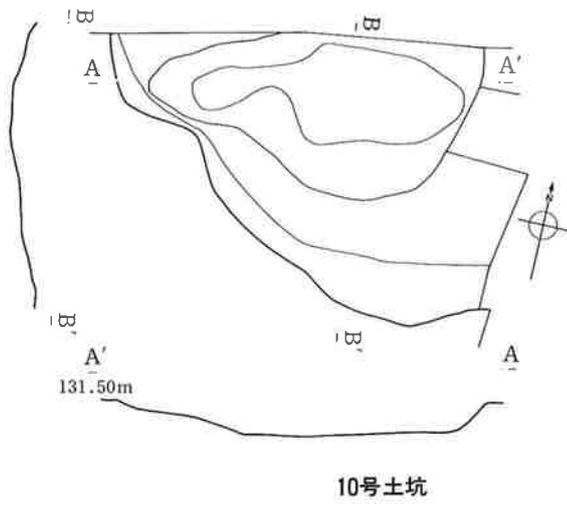
8号土坑



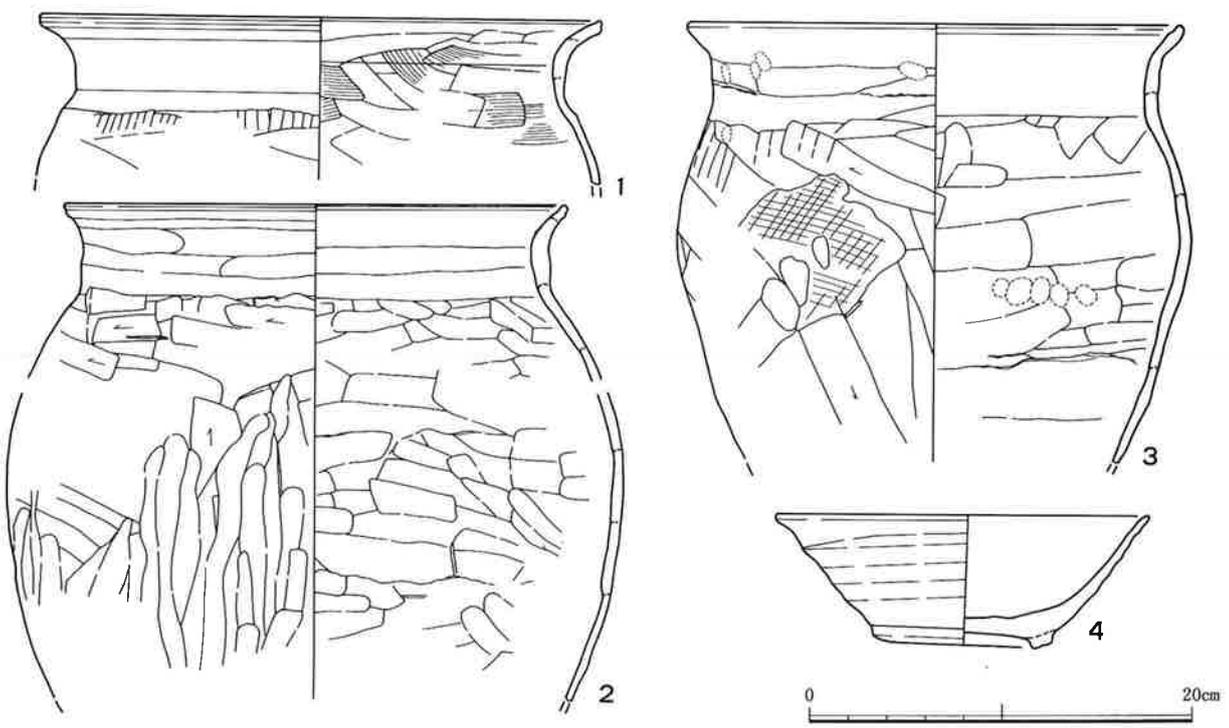
9号土坑



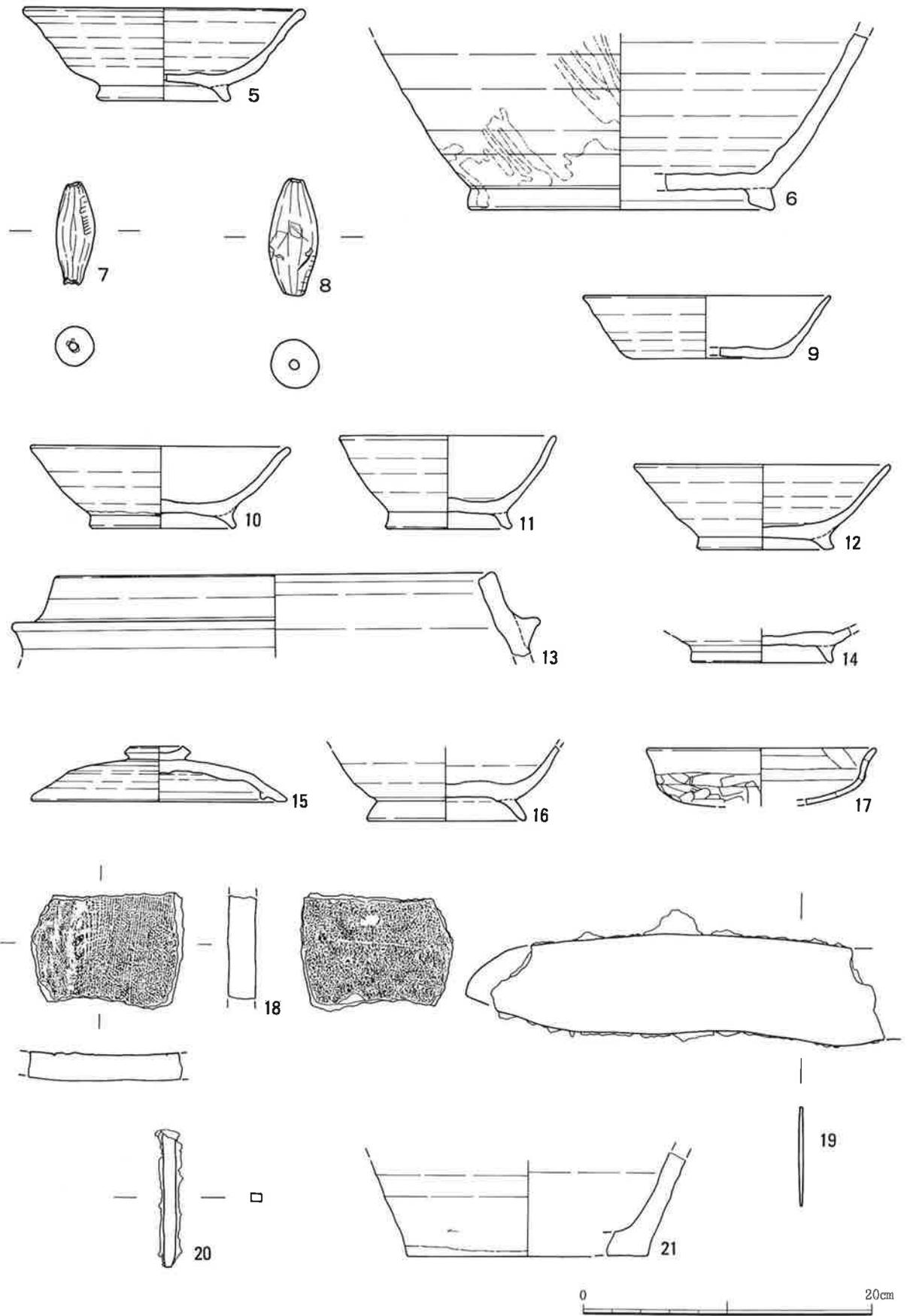
第9図 土坑(3)



第10图 土坑 (4)



第11图 土坑出土遗物 (1)



第12図 土坑出土遺物(2)

表3 1号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	土師器 甕	口径 22.0 底径 — 器高 —	①普通 ②橙色 ③細砂粒、白色粒、黒色粒、黒色輝石 ④口縁部1/4	口縁端部僅かに肥厚する。外面は口縁部横撫で、体部篋削り。内面 口縁部から体部横撫で。	
2	土師器 甕	口径 19.6 底径 — 器高 —	①酸化焰 ②にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、小礫、黒色輝石、雲母粒 ④口縁部～体部1/5	頸部で立ち上がって口縁部外行する。口縁部横撫で、頸部に指頭痕を残す。体部上位横方向、斜めに篋削り。体部下位縦方向篋削り。内面口縁部横撫で。	
3	土師器 甕	口径 19.6 底径 — 器高 —	①酸化焰 ②にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、黒色鈹物粒、雲母粒 ④口縁部～胴部	頸部で括れて口縁部立ち上がる。口縁部～頸部横撫で口縁端部に沈線を巡らす。体部上位篋削り。下位縦方向篋撫で。内面口縁部横撫で。	
4	須恵器 坏	口径(14.6) 底径 6.9 器高 5.1	①還元焰、やや酸化気味 ②浅黄色 ③細砂粒、白色粒、褐色鈹物粒 ④口縁部～底部3/4	口縁部僅かに外反する。ロクロ調整、底部回転糸切り後右回転方台形高台貼り付後撫で調整。	
5	須恵器 坏	口径(14.8) 底径(7.0) 器高 4.8	①還元焰 ②黄灰色 ③細砂粒、白色粒、褐色鈹物粒、小礫 ④口縁部～底部1/2	ロクロ調整、口縁端部丸く肥厚で外反する。底部右回転糸切り、台形の高台貼り付後撫で調整。	
6	灰釉陶器 瓶	口径 — 底径(16.0) 器高 —	①還元焰 ②灰黄色、釉-灰白色 ③細砂粒、白色粒 ④体部～底部1/6	外面 体部篋撫で調整。灰釉刷毛がけ。底部切り放し後回転篋撫で調整。 内面 ロクロ撫で調整。台形高台貼り付後撫で調整。	
7	土師器 土鍾	長 3.5 最大径 1.4 孔径 0.3	①酸化焰 ②にぶい褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鈹物粒 ④完形	外面縦方向の篋撫で調整。	
8	土師器 土鍾	長 4.1 最大径 1.7 孔径 0.3	①酸化焰 ②にぶい橙色 ③細砂粒、白色粒、黒色輝石、褐色鈹物粒 ④完形	外面縦方向の撫で調整。	
9	須恵器 坏	口径(12.8) 底径 7.8 器高 3.3	①還元焰 ②灰黄色 ③細砂粒、白色粒、黒色鈹物粒、礫 ④口縁部～底部1/2	ロクロ調整、底部右回転糸切り後周縁撫で。	

表4 5号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
10	須恵器 坏	口径 13.6 底径 7.2 器高 4.3	①還元焰 ②灰白色 ③細砂粒、白色粒、小礫 ④口縁部～底部3/4	ロクロ調整、口縁端部に丸味をもつ。	
11	須恵器 坏	口径 11.2 底径 6.2 器高 4.9	①還元焰 ②灰白色 ③細砂粒、白色粒、褐色鈹物粒 ④略完形	ロクロ調整、底部右回転糸切り、高台貼り付後撫で調整。高台端部に平坦面をつくる。	
12	須恵器 坏	口径 13.2 底径 6.4 器高 4.5	①還元焰 ②灰白色 ③細砂粒、黒色鈹物粒、礫 ④略完形	ロクロ調整、底部右回転糸切り、台形高台貼り付後撫で調整。	

表5 6号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
13	須恵器 羽釜	口径(23.0) 底径 — 器高 —	①酸化焰 ②灰黄褐色 ③細砂粒、白色粒、雲母粒 ④口縁部1/10	ロクロ調整、口縁部が内傾する。端部は平坦面をつくる。回転篋撫で調整。	

表6 8号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
14	須恵器 坏	口径 — 底径 7.2 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鈹物粒 ④底部	ロクロ調整、右回転糸切り、高台貼り付後回転篋撫で調整。高台は端部丸味のある三角形。	内底面に圏線めぐる。

表7 9号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
15	須恵器蓋	口径 13.1 つまみ径 2.8 器高 2.9	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④1/2	ロクロ調整、内面に小さな返りをもつ。口縁端部は丸味をもつ。つまみ貼付後周辺などで調整。天井部切り放し後肩部を回転斲削り。	左回転
16	須恵器坏	口径 — 底径 (8.2) 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色粒、褐色鉍物粒 ④体部～底部1/3	腰部に丸い張りをもつ坏。ロクロ調整、底部右回転糸切り、高台貼付後回転撫で調整。高台端部丸味をもつ。	内底面磨耗部分あり。
17	土師器坏	口径 12.0 底径 — 器高 (3.1)	①酸化焰 ②橙色 ③細砂粒、白色粒、黒色粒、黒色輝石 ④口縁部～体部3/4	丸く浅い体部から頸部で僅かに段をもって立ち上がる坏。口縁部は外反する。外面横撫で。体部斲削り調整内面横撫で調整。	
18	瓦 平瓦	厚さ 1.4	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色粒、褐色鉍物粒 ④ —	平瓦片。凸面斲削り調整。凹面に布目痕を残す。布目痕 1 cm 平方 8 × 15 本。	

表8 10号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
19	鉄製品 鉄鎌	長 (13.4) 幅 3.5 厚さ 0.2		先端及び着柄部を欠損する。刃部僅かに曲線をもつ。	

表9 11号土坑出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
20	鉄製品 釘	口径 4.8 底径 0.4 器高 0.3		断面方形を呈す。	
21	須恵器 瓶	口径 — 底径 (12.5) 器高 (5.0)	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒、片岩、礫 ④底部片	外面 体部回転斲削り調整。 内面 横撫で調整。底部砂底か、周縁一部調整痕あり。	

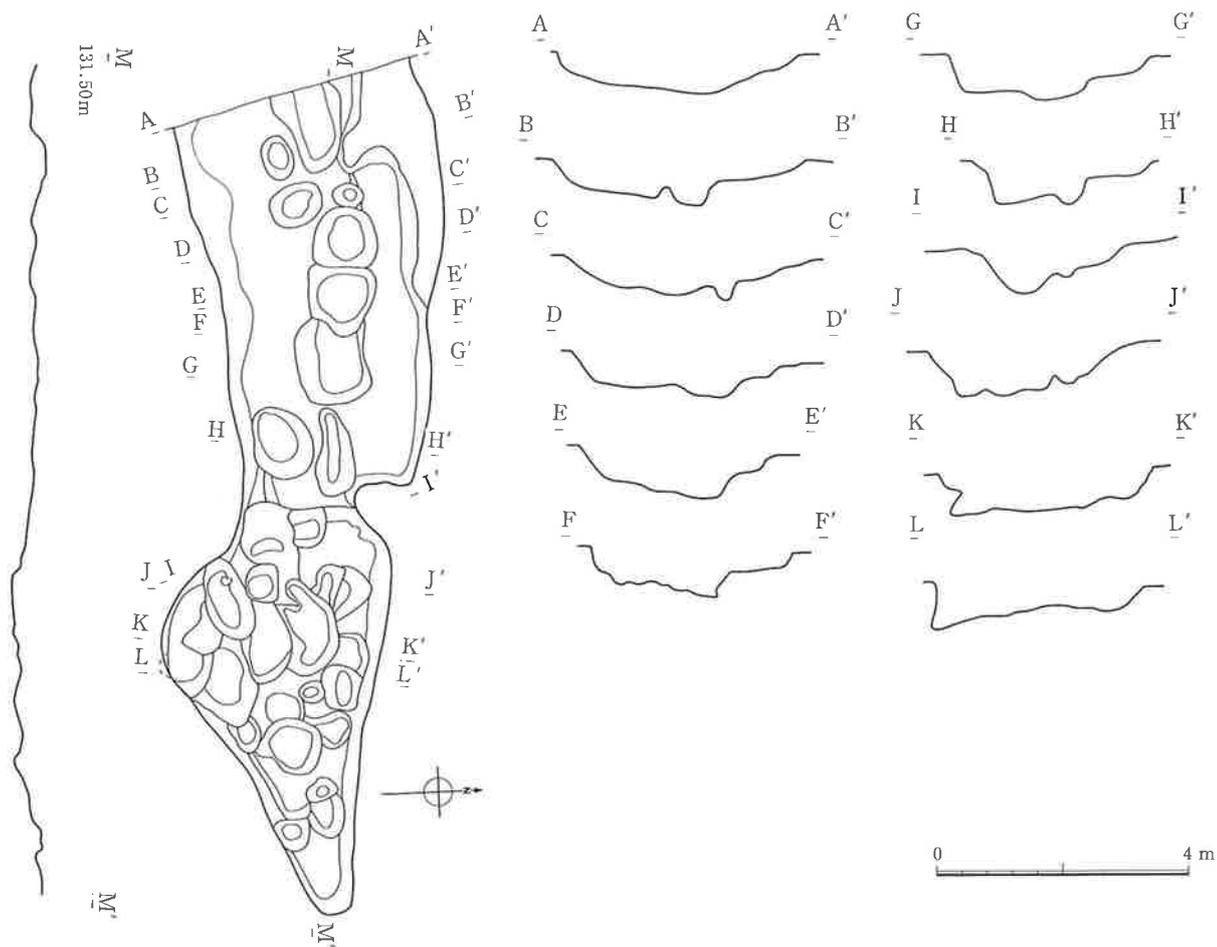
溝

1号溝 (第13図・P L 2-8)

本溝は、調査区の西南部に位置し、ほぼ東西方向に走行しており、西側は調査区外に延び、東側は調査区中央部南側で消滅している。また、周辺の地形は西から東へと下がる傾斜面となっているため、溝の底面の標高は西から東へと低くなっているが、確認面からの深さは西部では確認面より64cmと深く、東に向かうほど確認面からの深さが浅くなっている。底面は凹凸が激しく、径30～100cmの土坑の集合体ようになっており、西半部ではこの土坑状の落ち込みが溝の中央部を一行に並ぶように存在し、東半部では溝全体に認められる。壁は緩やかな傾斜からほぼ垂直になる部分、一部ではオーバーハングしているなど多様である。覆土は粘性の強い暗褐色土で、最上層の一部に砂層が認められる以外に水成堆積の痕跡は無い。遺物は覆土中より多くの土師器・須恵器・瓦などが出土している。構築年代は出土遺物より平安時代後半と考えられる。本溝の性格は溝というよりも重複している土坑群のような様相を呈するが、構築途中の溝のような状態にも捉えることができ、この点を明らかにするには未調査区に延びる溝の西方部分の調査が必要と思われる。

表10 1号溝出土遺物観察表 (1)

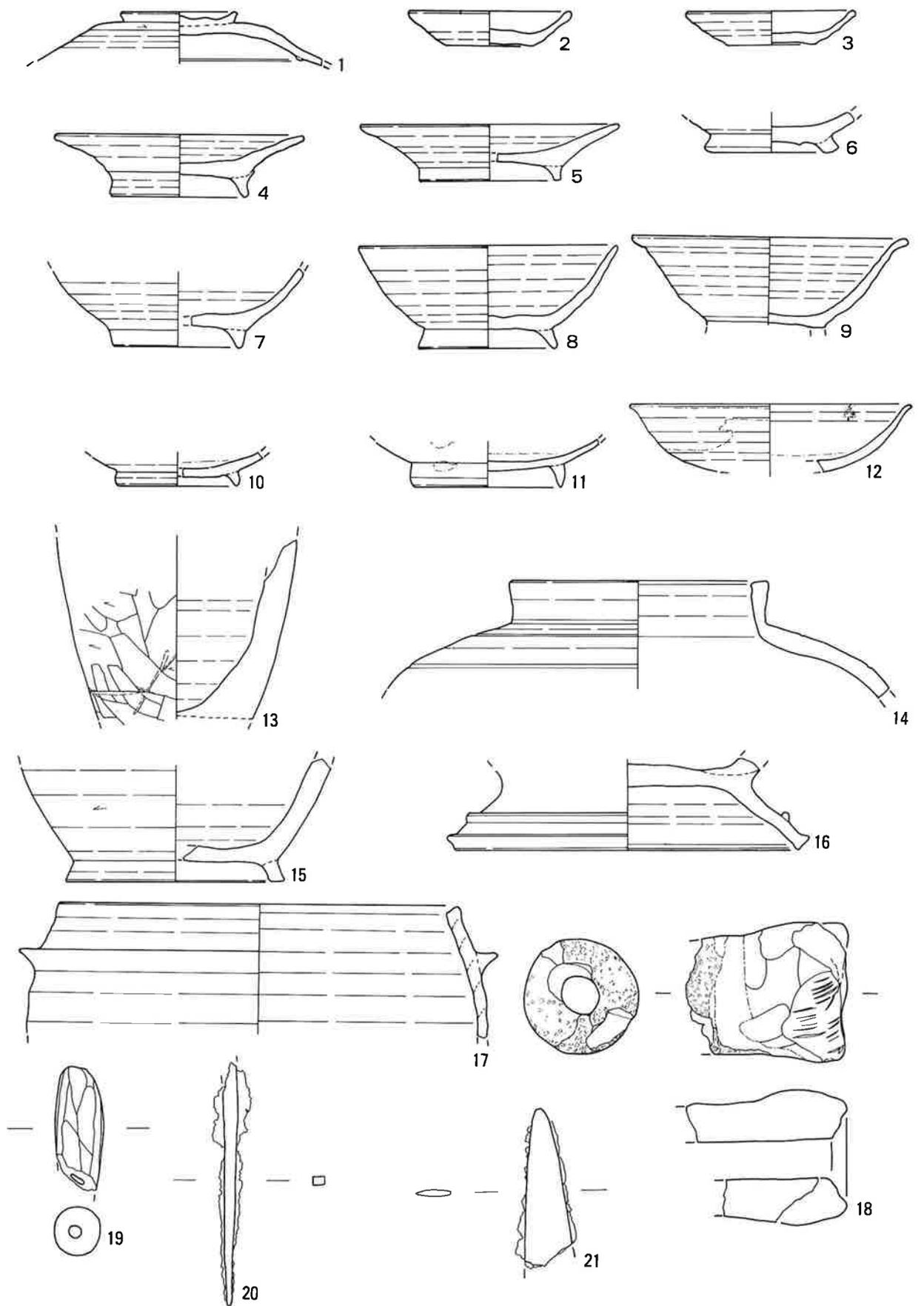
番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
1	須恵器蓋	口径 — つまみ径 6.1 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒、片岩、礫 ④つまみ～体部	大型のつまみをもつ蓋、ロクロ調整、口縁部内側に台形のかえりが巡る。天井部切り放し後肩部まで回転斲削り調整。	



第13図 1号溝

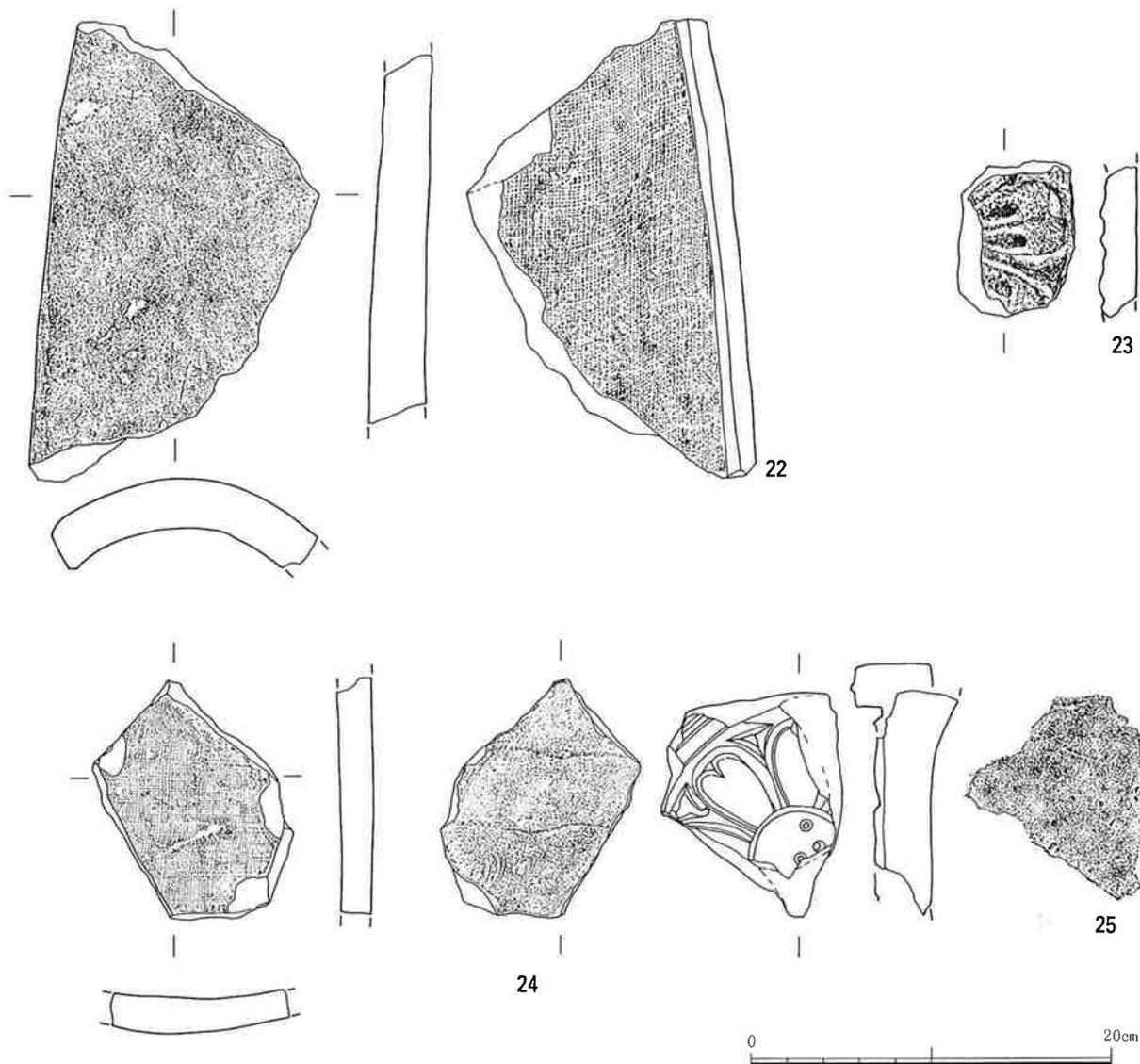
表11 1号溝出土遺物観察表(2)

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
2	土師器 皿	口径(8.5) 底径 4.6 器高 1.8	①酸化焰 ②灰褐色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉱物粒、雲母粒、片岩 ④口縁部1/5~底部	ロクロ調整、口縁部丸味をもつ、底部右回転糸切り。平方11×9本。	左回転
3	土師器 皿	口径(8.8) 底径 4.8 器高 1.7	①酸化焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉄物粒、雲母粒	ロクロ調整、口縁部丸味をもつ、底部右回転糸切り。	内底面磨耗部分あり。
4	須恵器 皿	口径(13.3) 底径 7.1 器高 3.3	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒、片岩、礫 ④口縁部~高台	口縁部が僅かに外反してひろがる皿。ロクロ調整、底部右回転糸切り、高台貼付後回転撫で調整。	
5	須恵器 皿	口径(13.6) 底径(7.5) 器高 3.0	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉱物粒、礫 ④口縁部1/4~高台1/2	ロクロ調整、口縁部に丸味をもつ、底部右回転糸切り、高台貼付後周辺部回転撫で調整。	
6	須恵器 坏	口径 — 底径 7.1 器高 —	①還元焰、やや軟質 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、礫、黒色鉱物粒 ④底部~高台	ロクロ調整、回転糸切り後高台貼付後回転撫で調整。	内面黒色漆附着。



0 20cm

第14图 1号沟出土遺物(1)



第15図 1号溝出土遺物(2)

表12 1号溝出土遺物観察表(3)

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
7	須恵器 坏	口径 — 底径 (6.6) 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、 白色粒、黒色鈹物粒、礫 ④口 縁部欠損、体部~高台	ロクロ調整、底部右回転糸切り、 三角形の高台貼付後回転撫 で調整。	内底面に重 ね焼きの痕 跡が残る。
8	須恵器 坏	口径(13.8) 底径 (7.2) 器高 5.4	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、 白色粒、礫、黒色鈹物粒 ④口 縁部~高台	ロクロ調整、底部右回転糸切り、 高台貼付後回転撫で端部の 丸い三角形。	
9	須恵器 坏	口径 14.5 底径 — 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、 白色粒、黒色鈹物粒、雲母粒、 礫 ④口縁部2/3~底部	ロクロ調整、口縁端部丸味をも って強く外反する。底部右回 転糸切り、高台貼付後周辺回 転撫で調整。高台部欠損。	
10	灰釉陶器 塊	口径 — 底径 (6.3) 器高 —	①還元焰 ②灰白色、釉-白色 オリーブ灰色 ③細砂粒、白色 粒。 ④底部~高台片	ロクロ調整、底部回転切り放し 後回転撫で調整。三角形の高 台貼り付け周辺回転撫で調整。	
11	灰釉陶器 塊	口径 — 底径 7.8 器高 —	①還元焰 ②灰白色、釉-白色 オリーブ灰色 ③細砂粒、黒色鈹 物粒、白色粒、④体部~高台1/2	ロクロ調整、底部切り放し後回 転撫で調整。三角形の高台貼 り付け周辺回転撫で調整。	内面に重 ね焼きの痕 跡あり。
12	灰釉陶器 塊	口径(14.4) 底径 — 器高 —	①灰釉 ②灰色、釉-白色 ③ 細砂粒、白色粒、黒色鈹物粒 ④口縁部~体部	ロクロ調整、口縁端部外反する。 体部は丸く貼りをもつ。回 転斲削り調整。釉はつけがけ。	

表13 1号溝遺物観察表(4)

番号	器種	法量 (cm)	①焼成 ②色調 ③胎土 ④残存	成・整形技法の特徴	備考
13	須恵器瓶	口径 — 底径 — 器高 —	①還元焰 ②灰白色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒 ④胴下部	ロクロ調整、外面横方向の篋削り、篋撫で。粗い調整。内底面は平坦面が少なく、すり鉢状を呈す。	
14	須恵器短頸壺	口径(13.5) 底径 — 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉍物粒、黒色粒 ④口縁部~胴部	ロクロ調整、口縁部直線的に立ち上がる、口縁端部平坦で内側に凹線が巡る。頸部~肩部に3本の沈線が巡る。	
15	須恵器瓶	口径 — 底径(11.4) 器高 —	①還元焰 ②灰白色 ③細砂粒、白色粒、礫 ④胴部~底部1/2	ロクロ調整、底部切り放し後撫で調整。台形の高台貼付後回転撫で。	
16	須恵器瓶	口径 — 底径(18.0) 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒、礫 ④脚部1/3	ロクロ調整、脚部中位と脚据端部に凸帯を巡らす。外底面に磨耗あり。	転用硯
17	須恵器羽釜	口径(21.0) 底径 — 器高 —	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、褐色鉍物粒、黒色鉍物粒 ④口縁部片	ロクロ調整、口縁部が内傾し、端部は平坦で凹線が巡る。体部に丸味をもつ。	
18	土師器羽口	長径 8.6 径 7.5 孔径 2.1	①普通 ②明褐色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒、礫 ④ —	外面先端部は淡黄色のガラス質熔融物が付着。最先端部が欠損しても使用し続けたと思われる。外面粗い篋撫で調整。	
19	土師器土錘	長径 (4.4) 径 1.7 孔径 0.4	①酸化焰 ②にぶい橙色 ③細砂粒、黒色粒 ④ —	外面縦方向の撫で調整。	
20	鉄製品鉄鏃	長幅 8.7 幅 0.4 厚さ 0.3	柄及び中子部分。		
21	鉄製品鉄鏃	長幅 5.6 幅 1.35 厚さ 0.25	身部中央で欠損。		
22	瓦丸瓦	厚 2.0	① — ②黒灰色 ③細砂粒、白色粒、礫、片岩	側面篋削り端部篋削り調整。凸面篋削り調整。凹面布目痕を残す。布目1cm平方8×8本。	
23	瓦軒丸瓦	厚 1.2	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒、片岩、礫、褐色鉍物粒 ④ —	八弁複葉。瓦当面焼成時の変質をうける。裏面は丁寧な撫で調整。	
24	瓦平瓦	厚 1.4	①還元焰 ②灰色 ③細砂粒、白色粒 ④ —	平瓦 凸面横位の篋撫で調整。凹面布目痕を残す。1cm平方11×9本。	
25	瓦軒丸瓦	厚 2.2 縁厚 3.0	①還元焰 ②灰色、③細砂粒、白色粒、黒色鉍物粒、礫 ④ —	素弁八葉、中房の子葉1+2+a 筈のつぶれによって不鮮明。外縁は高くつくり出す。内面撫で調整。	

第5章 まとめ

今回の調査で検出された遺構は、いずれも平安時代の所産のものと推定され、伴出遺物から見た時期は9世紀後半から10世紀代にその多くが構築されたと考えられる。遺構から見た本調査区の性格は住居跡の存在から集落であったことは明らかであるが、住居が2軒と少数であるのに対して土坑が11基と多く、本調査区の主体となる性格は異なるものと思われる。土坑群の性格としては5号土坑のように形状・規模や遺物の出土状況から墓の可能性もある例もあるが、形状の多様性から各種の性格の異なる土坑より成立していると思われる。本調査区が多様な性格を有す場であったと推定される。また、本調査区の南方500mに山王廃寺が存在するが、その関係を示す資料は僅かに瓦が出土したにすぎず、時期的に見ても齟齬を有すことから深い関係は無いと思われる。



1. 調査区全景



2. 1号住居



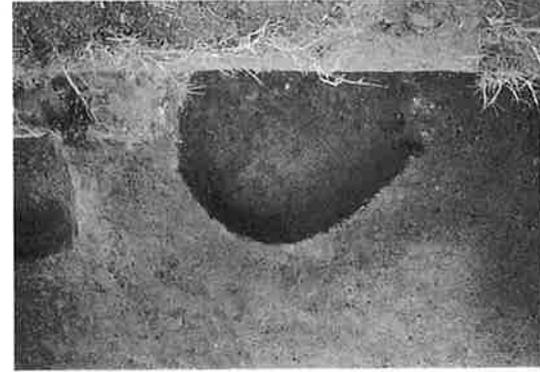
3. 2号住居



4. 1号土坑



5. 2号土坑



6. 3号土坑



7. 4号土坑



8. 5号土坑

P L . 2



1. 6号土坑



2. 7号土坑



3. 7·8号土坑



4. 9号土坑



5. 10号土坑



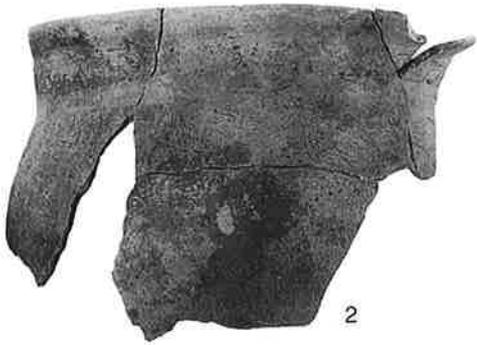
6. 11号土坑



7. 11号土坑



8. 1号沟



2



4



9



5



7



8



10

1号土坑



11



12

5号土坑



15



17

9号土坑



20



19

10号土坑



15



5

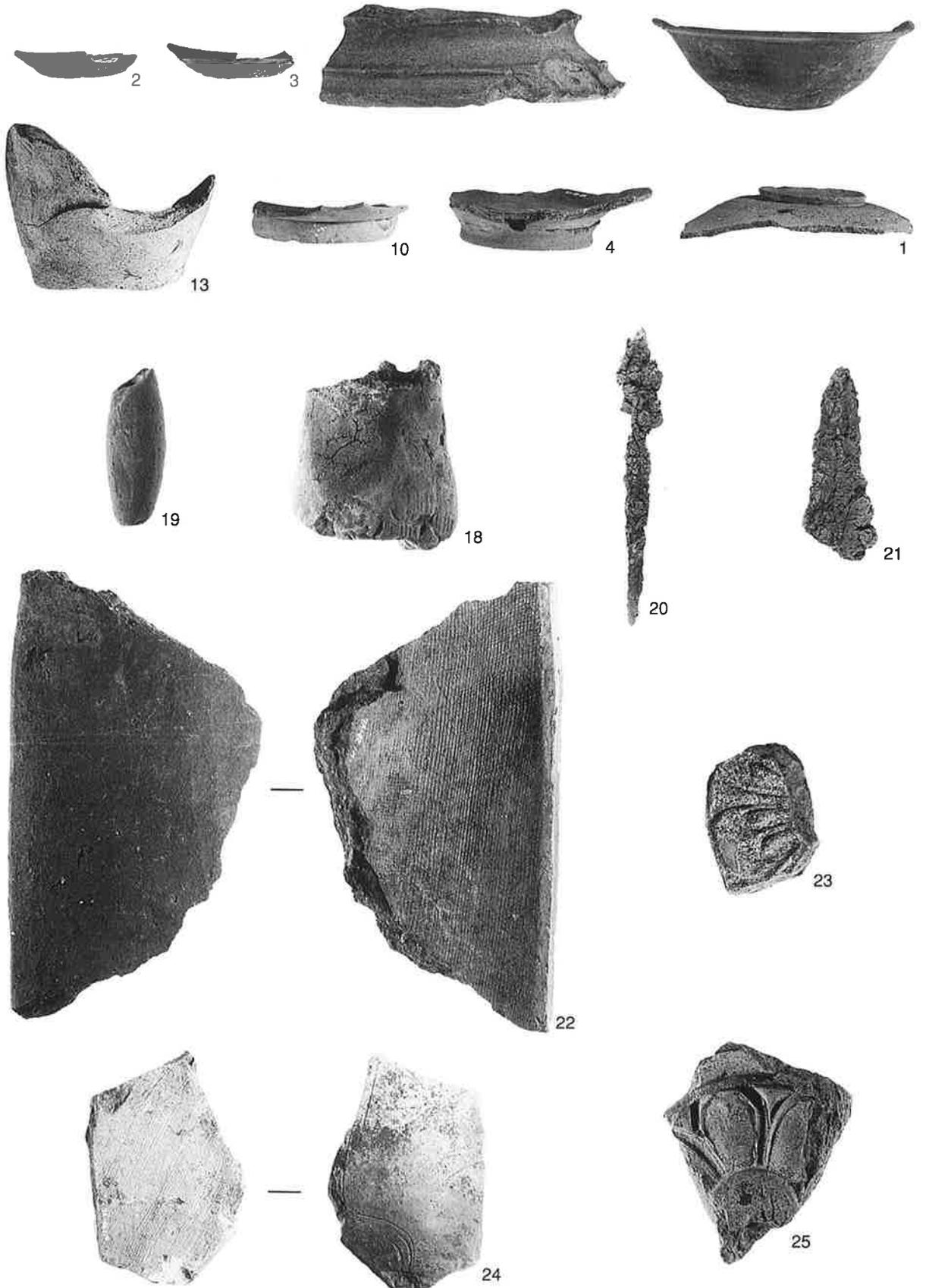


8

1号沟

出土遗物(1)

P L . 4



1 号 溝

出土遺物 (2)

総社観音沢遺跡

印刷 平成9年3月10日

発行 平成9年3月15日

編集 山武考古学研究所

発行 総社観音沢遺跡調査会

印刷 (株)文化総合企画

TEL 0476-93-0593

